

令和3年度 多文化共生の担い手連携促進研修会

日本語教育における ICT活用

藤本かおる

武蔵野大学

2021年12月9日

自己紹介

- 武蔵野大学グローバル学部日本語コミュニケーション学科 准教授
- 専門:日本語教育、教育学(特に遠隔教育、eラーニング)
- 大学、大学院で通信制教育を経験、放送大学のオンラインゼミ、コンテンツの電子化などに関わる
- 大学では一般科目でサブカルチャー科目を担当、大学院でICT利用に関する授業を担当
- 2021年度ハイフレックスモデルに関する研究で科研を取得

2021/12/9



続編出るか?!



コロナ禍による授業のオンライン化 (大学・日本語学校を中心に)

- 学生も教員にとって通学での学びが当たり前
- コロナにより、「不本意に」オンラインで学ばなければならない
- 期間限定？いつまでやるの？
- 2020年は、前提とニーズの違いによる「やらされ感」のマイナス印象スタート
- **1年半以上続けてきて、「やらされ感」はどう変わった？これからどうなる？**

ほぼほぼ結論

- 対面、オンライン、どちらが優れているか？

→ナンセンスな問い

- 遠隔教育や通信教育は学ぶのが大変

→昔からわかっていること、しかし、理由があるからその方法を選ぶ

- ICTを活用した学びも同じ

- 対面「と」オンライン

→学習者にとって、学びのチャンネルが増えた！

“テクノロジー”と学び

- 「テクノロジーといったら何ですか？」
- 現在では、多くの人々が、パソコンやネット、スマホといったIT・ICT技術を思い浮かべる
- 「学び」で考えると、その時代の最先端テクノロジーを積極的に利用してきた
- 特に遠隔教育（通信教育）
- 遠隔教育では、同期型システムの利用も20年くらいになる

ちよつと歴史的な外観を... (玉木他2010)

19世紀末
テキストを郵送する
遠隔教育が始まる

1930年代
ラジオが教育ツール
として普及

1950~1960年代
テレビを使った遠隔
教育が普及

単一メディアの理由 / 一方向の情報発信

1960年代
~1980年代半ば
記録媒体 (カセット
ト、ビデオ)、
FAXの普及

1980年~1990年代
半ば
通信衛星の活用が一般
化。PCが普及し、CBT
が広がる。記録媒体で
あるCD-ROMが普及。
インターネットの活用
が始まる。

1990年代半ば以降
ブロードバンド化の
進展。WBTVの普
及、ブログ、SNS
などネットワーク
活用の活発化

複数メディアの利用
 / 一方向の情報発信

複数メディアの利用
 / 双方向の情報発信
 が可能

複数メディアの利用 / 双
方向の情報発信が可能 /
デジタル映像の高速配信
が実現

1990年代以降は...

- 2000年：eラーニング元年
 - 批判も出たものの、特に企業内の人材育成やコンプライアンス部門でeラーニングが定着
 - 2004年には批判からブレンディッドラーニングが形成
- 学校教育でも、コンピュータ教室の普及に伴い、LLからCALL（Computer Assisted Language Learning）へ
- 2010年代後半には、スマホの発達と普及とSNSの爆発的な普及

双方向が当たり前の時代

教室は常に最先端（だったはず）

- 教室は常に新しいテクノロジーを積極的に導入
- しかし、**なぜかICTだけは導入が遅れていた**
- 2020年～多くの人々がICTでの学びを経験
- 以前よりは便利なこともあるので、ブツブツ言いながらも使われ続ける
- **企業のPC導入の歴史を見れば歴然！一度使い始めたら、その流れは止まらない**

ICTと学習者

- デジタルネイティブ：生まれた時からデジタル機器が、身近にある世代
- 20代以下は、国を問わずデジタルネイティブ
- 紙媒体よりもインターネットでの情報収集
- 読むよりも動画



ICTと学習者

- 特に、日本国内で学ぶ日本語学習者は、母国から離れていることにより、日本人以上にインターネットを使い交流することになれている…**と想像していたら？**
- 現代の若者の多くは、「**スマホネイティブ**」
- Z世代以下の若者が慣れ親しんでいるのは、「**コミュニケーションツール**」として、「**楽しむ**」、「**調べる**」、「**暇をつぶす**」ツールとしてのICT
- **「学びのため」のものではなかった**という事実

ICTと学習者、現在は・・・

- 若くても、ICTを利用してうまく学べない層がいる
- デジタルネイティブだからといってICTを使ってうまく学べない人も多い
- ネット接続環境や使用端末の問題もまだ大きい
 - 教師だけでなく学習者にとっても、「日本語を学ぶ」以外の負担が増える！
- また、ツールは使うと「**すごくやった気になる**」という厄介な面も...

見えてきたデジタルデバイト問題

- デジタルデバイト
「コンピュータやインターネットなどの情報技術（IT：Information Technology）を利用したり使いこなしたりできる人と、そうでない人の間に生じる、貧富や機会、社会的地位などの格差。個人や集団の間に生じる格差と、地域間や国家間で生じる格差がある。」（IT用語辞典 e-Words より）
- ITを使いこなせる人と使いこなせない人の間には、様々な格差が生じるということ
- **学びにおいても同様、ICTでの学びになじめないと今後不利益を被ることが出てくる可能性が高い**

同期授業の得意不得意

- 教師と学習者、学習者同士が直接やりとりができる
 - 遠隔教育における孤独感の軽減、実際の教室活動に近いことができる
- しかし、**教室活動を全く同じにできるわけではない**
 - ☒ **ここを理解していないと、対面授業の教室活動をそのままオンラインでも再現しようとしてしまう**
- 結果、対面授業で意識せずできていたことがうまくできず、**ストレス**になったり**同期型授業はダメだ**と思ったりする

非同期授業の得意不得意

- 講義型の授業を配信する→パワポや動画を配信
- 確認テストなどをする→自動採点もしてくれる
- 学生の提出課題を管理し、提出物にコメントする

○ 「先生が教える」と「学生が知識を得る」のは得意

- 学習者は、自分が学習できる時間に自分のペースで学習することができる
- うまくやると、学生の自律性を高め、学習量を増やすことができる・・・が・・・

単に課題を提出させるだけだと、学習者のモチベーションは下がることも多い

同期 + 非同期の活用

- 語学教育へのデジタル技術の導入では、**同期型授業のメリットは聴解力や会話力のアップ**
- **読み書きは、非同期の方が推奨されることが多い**
- つまり、**同期型授業で4技能全てを完結させようとする**ことに無理があるのかも？
- 非同期の学習コンテンツは、対面でももちろん使える！（オンデマンド+対面授業というデザイン）

学びになぜテクノロジーを使うのか

- 学習効果との関係
- すべての教室活動は、**学習効果を考えデザイン**されている（べき）
- 今までのやりかたでは十分でない場合、テクノロジーを導入する
- これからは、対面のニーズや効果が考えられるなら対面、オンラインのニーズや効果が考えられるならオンライン
- **どっちがいいとか悪いとかではなくニーズと目的**

同期型授業が苦手なこと

察する

見守る

日本語教育への影響

- 手書きの指導
- 学習者の理解度を授業中に測る
- 一斉発話練習
- 机間巡視
- 教室内の一括把握

などなどが難しい



察する



見守る

先行研究からわかっている同期型システムの特徴

ネットの環境でタイムラグが必ず発生している

画面に収まらないといけ
ないので、動きが制限される

アイコンタクトやノンバーバルコミュニケーションが伝わらない

諸要因から、感情の伝わり方が対面とは異なる

その反面...

- ブレイクアウトを使うと、対面教室よりもディスカッションが捗ること多い
- 顔出しはあまりディスカッションに影響していない（気がする）
 - ブレイクアウトの進行をどう見守るか？
 - ディスカッションのアウトプットをどうするか
- **目的などによるツールの選択と手法の重要性**

ICTを学びに導入する際に重要なこと

- 「これまでしてきたこと」にこだわらない
- **できないことはできない**
- **じゃあ、どうしたらいいのか？**
- **できないことを受け入れ、その上で目的を達成できる方法を模索**する

→サイモンソン 「同価値理論」 (1999)

ICTを学びに導入する際に重要なこと

- **学習者の端末がスマホ...**
- パソコンよりもできることが限られる
→mラーニングの手法を取り入れたり...

- **対面？オンライン？**
- ニーズ調査の必要性
- ボランティア教室ならお互いに相談して決めたり...

学生がスマホしか持っていない問題

- ビジネスパーソンではあり得ないが、日本語学校やボランティア教室では今後もこの状況は続く
- **学習者がスマホしか持っていないのは仕方がないこと**
- そのために「教師が使いたいツールが使えない」と不満を感じるのはそもそも授業デザインがニーズに合っていない
- **学生がスマホしか持っていないのであれば、それにあった方法を考えるのがICT活用**

Mラーニング

- mラーニングのmはモバイルのm
 - 以前だと携帯、現在だったらスマホを学習の中心機器として使う
- mラーニングの背景
 - イギリスのニートに対する職業訓練
 - アフリカ諸国での教育支援など
- 社会的弱者でも学べる環境

Mラーニングのいいところ

- パソコンを持っていなくても学べる
- 入力したものが学びの「ポートフォリオ」となる
 - 記録として残せるので、自分の学習の進捗が見られる
- 様々なサービスと連携でき、それを共有できる
 - テキスト入力だけでなく、音声や動画を手軽に利用できる
- 意外と協働作業も得意
 - ファイルのやりとりや共有ができるので、それらを通して協働作業が可能

学習者がスマホしか持っていない

- zoom上でのファイルのやり取り
 - パソコン同士だとチャットで簡単にでき、学習者はすぐにそのファイルに入力することも可能
 - 学習者がスマホだとパソコンよりも保存作業が煩雑になり、むしろパソコンより扱いが難しい
- 学習者が日常的に使っているSNSなどを学習に使う！



対面かオンラインか

- 組織の基本理念や目的、そして戦略次第
- これから重要になるのは、どのようにICTを組織的に活用するのかという“戦略”

→留学生が入国できない！ただただ入国できるようになるのを待っていただければいいのか？

- ボランティア教室の場合、参加者の希望により柔軟性を持たせる

→さまざまな状況の参加者が学びやすくなる

ICTを使った効果的な日本語授業って？

- 日本語教育でも研究の歴史は浅くない
- でも、「やれる人」がやっていた状態が長く続いた
→限定的な研究成果
- **2020年に爆発的に利用者が増加**
- 今後、大量の実践報告から「正解」が見いだされていく可能性
- つまり、**私たちの実践がより良いICT活用教育を作っていく！**

ICTと学習者、これからは・・・

- 若くても、ICTを利用してうまく学べない層がいる
- 教師だけでなく学習者にとっても、「日本語を学ぶ」以外の負担が増える！
- これは世界的に徐々に緩和（日本でもGIGAスクール構想がようやく・・・）
- ICTを使って学ぶのが“当たり前”の層が増えてくる（21世紀スキル）

→教師はどうなる？ どうする？

複雑化する授業での教師と学習者

- 教育の場は、大転換期を迎えている



ボローニャ大学における1350年代の講義風景を描いた写本挿絵

複雑化する授業での教師と学習者

- 教室環境は複雑化（対面、オンライン、同期非同期、ハイブリッド、ハイフレックス...）
- オンとオフの学習者を均一に指導できない
教室にいる学習者とオンライン上の学習者、両方を見る負担
- **1人の人間の処理能力を超える**



複雑化する授業での教師と学習者

- 必要な意識

- ✓ ICTは様々な学びをサポートするツールに過ぎない
- ✓ 教師が教室の全てをコントロールするのが最善というわけではない

- 教師は学習者にとって学びの協力者
- 学習者は教師にとって学びの協力者



DX時代の学び

- DX（Digital transformation）ITによって人の生活の質が向上、ICTはより発展し社会に浸透する
- AIの発達
- ネットの情報の多くは無料、見ている人は発信者が有資格者かどうかは気にしない
- **教科書に載っているような知識はいくらでもネットで探せるように**
- **「教育のアンバンドル化」**（立教大 中原淳先生）

授業のアンバンドル化

1. オンライン授業では教室のキャパが大きくなり、以前には考えられなかったような人数に一度に教えられる
 2. 教員が現地に行く必要がなくなり、広範囲により多くの教育活動を行えるようになる。
 3. 組織に所属する概念がアンバンドル化されることにより、人員配置が自由になる
 4. 大学は、授業の共有を行うことで、現在は、個々の所属組織で雇用している教員の固定費を下げるができる
- **メリット：教育の機会の拡大（教師、学生とも）**
 - **デメリット：教師の人員削減などにつながる**



授業のアンバンドル化

「この4点は、もちろん机上の空論であり、妄想です。
しかしながら、この行き着く先には、今までとは異なる
大学、教育機関のあり方が広がっているような気がして
いました。」 by中原先生

- 語学における学習者同士の学び合い（Hello Talk, Duolingo など）
- 地域の枠を超えての研修もあつと言う間に当たり前に
- すでに、これを現実化させようとしている動きも
- **そもそも滞在ビザの縛りが無い場合、居住地に縛られる必要があるのか？**

利便性を考える

- 地域に学べるボランティア教室がない
- 忙しくてボランティア教室の時間に教室に行けない
→ **日本語が学べない、それが生活にも影響する**

- オンライン授業を開講し、地域の枠を越えたら？
 - ✓ 遠隔地においても学べる
 - ✓ 教える方も学ぶ方も自宅から参加できる
- **利便性が高まり、学びの機会が増える！！**

教師にとっての“21世紀スキル”

- afterコロナはbeforeコロナの状態に戻るわけではない
- 仕事でデジタル機器を使うのが当たり前のように教育でもその利用は当たり前になる
- ICTの特徴を生かした利用方法であれば、オンライン授業でも対面授業でも有益に利用できる！

対面、オンラインという形式を問わず、授業目的や学習者にあったICTの活用ができることが、教師にとっての21世紀スキルの1つになる！